

山形県立山形東高校① (山形市)

学校は見守ってくれていた



患者や自分自身を励ます「大丈夫」が口癖という細谷亮太さん



「ゴジラ」にも詳しく、多くの著作がある加藤典洋さん

1884 (明治17)年

創立の山形県中学校を前身とし、県内一の歴史を誇る山形東高校。著名な卒業生を多く輩出する。

聖路加国際病院(東京都中央区)顧問で小児科医の細谷亮太さん(68、1966年卒)は、小児がん治療の最前線で長年子どもたちと向き合ってきた。

地元の公立小・中学校に通ったが、授業は後れている子に合わせてゆっくり進み、先生の質問が分かってても、「手を上げるなどと言われた。みんなの考える時間がなくなるからって」。高校に入学すると、「手を上げてこい、

全力疾走(しんそう)していい。抑圧から解放(しんぱ)された」。

「コッコツとは勉強せず、「要領(ようりやう)がよかった」。授業を聞けば、どこが試験に出るか分かった。「試験前日(しけんぜんじつ)におさらいをして、当日(とうじつ)にどれだけできるか」。ヤマが当たるのが快感(かいたん)だった。

東北大学医学部を経て、聖路加国際病院へ赴任(しゆにん)。小児がんを専門とするようになる。「当時は治らない病気で、子どもがどんどん亡(な)くなった。自分がなんとかしなくちゃと感じた」。中学(ちゅうがく)と大学(だいがく)は「努力(どりょく)する才能(さいのう)はなかった」が、医師(いし)になって「初めて一生懸命(いっしょうけんめい)やるようになった」。

66歳(ろくじゅうろくさい)で一線(いっせん)を退(ひ)いた。ただ、祖父(そふ)の代(よ)から続く実家(じけ)の診療所(しんりやうじょ)の院長(ちやうりやう)になり、週2回(しゅうに2かい)は山形(やまがた)と東京(とうきょう)を往復(おうふく)するなど、相変(あひら)わらず忙(いそ)しく動き回(まわ)る。

早稲田大学(わせだだいがく)名誉教授(めいぎょけつじょう)で、戦後(せんご)日本(にっぽん)をめぐ(めぐる)る議論(ぎろん)をリード(りーど)してきた文芸(ぶんげい)評論家(ひろんか)の加藤典洋(かとうのりひろ)さん(68、66年卒)は細谷(ほそや)さんと同(どう)学年(がくねん)だ。小学生(しょうがくせい)の

ころからよく本(ほん)を読む文(ぶん)少年(せうねん)だった。

高校(こうこう)2年生(にねんせい)の1学期(1がき)、中間テスト(ちゅうかんテスト)の前に勉強(べんきやう)をしていて、無性(むせう)に別(わか)の本(ほん)を読(よ)みたくなった。たまたま父(ちち)が購読(こうとく)していた文芸雑誌(ぶんげいざっし)「文学界(ぶんがくがい)」を手(て)に取(と)ると、大江健三郎(おほえきけんざう)の連載(れんざい)「日常生活(にちじふせいの)の冒険(ぼうけん)」があった。「同時代(どうじだい)の日本(にっぽん)の小説(しょうせつ)って、こんなにおもしろいものなのか」とそれ以来(それいらい)、完全に「オッカケ」に。大江氏(おほえき)に関するものはすべてスクラップ(すくらっぷ)した。

大学(だいがく)も大江氏(おほえき)の影響(いへい)もあり東京大学(とうきょうだいがく)文学部(ぶんがくぶ)英文学(ぶんがく)科(か)に。ただ、当時(たうじ)は学生紛争(がくせいふんそう)のさなかでストライキ(ストライキ)が長引(ながひ)き、卒論(そつろん)も指導教員(しうぼうきょういん)なしで提出(ていしゅつ)した。

国立国会図書館(こくたつこくかいとしよかん)勤務(こむむ)を経て、明治学院大学(めいしやうげんがく)、早稲田大学(わせだだいがく)で教授(けつじょう)として教(おし)べんをとる一方(いっぺう)、数々(かずかず)の文章(ぶんしやう)を发表(はつひやく)。特に、戦後(せんご)の日本社会(にっぽんしゃかい)を「ねじれ」という観点(くわんてん)から分析(ぶんし)した「敗戦後論(ばいせんごろん)」(95年発表)は、大きな反響(はんきやう)を呼(よ)んだ。「それまで近いと思(おも)っていた人も含(こ)め、100人以上(いじゅうにひゃくにじゅうに)以上(いじょう)から批判(ひはん)された」という。かなり過酷(かこく)な経験(けいけん)として記憶(きおく)に残(のこ)る。

高校時代(こうこうじだい)を振り返(かえ)ると、「かなりひね(ひね)られていたと思(おも)うけど、学校(がく)は見守(みまも)ってくれていた。社会(しゃかい)全体(ぜんたい)にそういう余裕(よゆう)があったのかな」。